

# ほんばこ



12月しわす はるまちづき ごくげつ(師走 春待月 極月)

※二十四節気※

たいせつ大雪 7日 朝晩にうっすらと氷が張るのが見られます。北国や日本海側では本格的に雪が降り出します。

とうじ冬至 22日 1年で最も昼が短く、夜が長い頃のことです。これから日が伸びていくため、古代では冬至が1年の始まりでした。

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2019  
2019年も残りあと数日となった今日この頃ですが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。もう少しで冬休みです。インフルエンザや風邪にはかからないよう、体調管理をしっかりと行いましょう。

## 図書委員からお薦めの本

### 『さくら』 西加奈子 著 小学館文庫

主人公薫が幼少期から大人になるまでに家族に起こった出来事を回想していく物語です。みんながうらやむような家族が、突然の不幸に見舞われ家族のきずなが大きく揺らぎます。

私はこの本を読んで、人は変わっていくもので永遠は存在しないと感じました。また、自分の力だけではどうにもならないことがあるなど思いました。途中つらい場面がいくつかありましたが最後は笑顔で終わったのが印象的です。すごく切なくでも温かい、家族5人と愛犬サクラのお話ぜひ読んでみてください。

(インターネットのサイトを参考) (1年生女子)

図書委員会主催図書館読書会(令和元年度第2回)報告

[1] 日時・場所 R1. 12. 9(月) 放課後15:40~ 本校図書館にて

[2] テーマ 坂口安吾『墮落論』(集団読書用テキスト)

[3] 参加者: 生徒14人(1年生5人、2年生9人)、教職員5人(撮影含む)

[4] 手順: 語彙がやや難解なので本文を音読しつつ解説を加えた。次に要約解説プリントも読んだ。安吾の言いたいことの核心(要諦): 戦時中の軍国主義・武士道のモラルは非人間的だ、そのようなモラルは否定し、生きよ墮ちよ。他方、人間は墮落し切れるものでもない。生きることに即した新しいモラルが必ず生み出されるだろう。

[5] 出た意見の概略

(1) まずは読んでみて全員の感想: ・戦後の日本の、生きようとする人への励ました。他方、一種の性善説であり、モラルは必ず復活する、と考えている。・自分の欲に正直であるべきだとし、武士道など形骸化したモラルを否定している。芥川の『羅生門』は生きるためにする悪は仕方がないとして、悪は悪だと見ている。安吾は、欲を正直に出せばそれが人間の生きる道で、他からは是非善悪を言われることはない、と見ている・安吾は生きること自体は肯定している。・人間は自分の欲に正直に生きてよい、何があっても生きるべきだ、と言っている。・墮落すること=生きること、と考えている。世間の常識やモラルから外れたとき、どう生きるか? その人の真価が問われる。・戦中何も考えないで美しい世界を生きていたが、それは本当に生きることではなかった、戦後生きる=墮ちること人間に戻った、とある。これは現代にも通じる。誰かの意見にうなずく、自分の考えを言わないのは、主体的に自由独立の人間として生きていないと言える。・墮ちる方向性が問題で、正しく生きるために墮ちるのはよいが、間違った方向に目的もなく墮ちるのはよくない。・安吾は単なる欲望や快楽の肯定だろうか? また人はやりたいことをするだけでなく、

やるべきことを考えるべきでは？それは富国強兵や高度成長のために「役に立つ」ということとは違う。・『羅生門』では下人は完全な暗黒世界に突入。芥川は悪漢（ピカレスク）小説で憂き晴らしをしている。対して安吾は正しい落ち方、間違っただち方を考えている。・「正しく生きる」も「間違っただち生きる」もない。『羅生門』も安吾も同じで、生きるために、欲望というより生そのものを肯定している。

（2）果たして「モラルは復活する、人間は信頼できる」のか？：・モラルは復活するのか？震災後日本人が略奪をしなかったのはなぜ？・それは日本人がそれなりの教育を受けていたからでは？・現代の日本の誇るべきものとは？ 戦前戦中は「美しい自然と子ども達の健康な身心」、70年代には「高度な科学技術と経済大国」と言った。今の日本は？ 文化、つまり、おもてなし、アニメ、和食などか？日本語もきれいな。・落し物が帰ってくる、治安が良い。いや、治安は本当に良いのか？ 500円傘を勝手に持って行く人がいる。・神戸の震災で、公衆電話のところで100円硬貨を沢山人にあげている人がいた。それを見ると自分も人に恩返しをしようと感じる。・「恩送り」「情けは人のためならず」は昔から言う。・大災害などがあると利他的な遺伝子のスイッチがONになるとの主張もある。・現代の日本で誇るべきものは、現代の若者だ。平和を愛し思いやりがあり心配りもでき災害ボランティアにも行こうとする。・日本人の誠や信義は、外国でも通ずるのか？・シリア難民問題の時ギリシアにもドイツにも日本人の三十代の女性がいて活躍していた。中村哲（惜しくも先日亡くなられた。）はアフガンで若者と共に尽力し信頼されていた。・今の若者に安易に海外に行けとは言えない。海外は危険すぎる。・日本人が秩序を守るのは、戦後の、明治以降の、あるいは江戸期以来の、教育や文化のおかげか？コメ作りで協力し合う体質になっているのか？人間本来のDNAか？・アフリカで木から降りて直立二足歩行を始め脳が大きくなったが、牙も短くなった。人間は競争して勝つために生きる存在ではなく、本来助け合う存在だ。霊長類のゴリラやチンパンは牙が長い。人間は牙が短い。アフリカのハッザやアマゾンのヤノマミは食糧を平等に分配し弱いものを守る。農耕で富を蓄積して階級や差別が生まれたとか。・性善説は儒学（孟子→朱子学）にあるが、安吾が「人間は落ちきれない」としたのは何を学んだからか。実体験に基づく深い深い確信なのか。・震災でも略奪しないのは、数日待てば助けが来ると信頼しているから。警察や物流も生きているから。戦後豊かで富の分配もうまくいき皆が暮らしをしているから。戦前の関東大震災では不幸なことがあった。敗戦後秩序正しくしたのは、戦争から解放され明るい未来を信じることができたから。

（3）安吾の言う「現実の生活から遊離した美や倫理は空疎だ」について。その他。：・教科書でならう音楽も美術も書道も詩歌もすべて現実から遊離しているものは空疎か。・では、空疎でないものとは何か？伊藤左千夫の言う「牛飼の歌詠む時に世の中の新しき歌大ひに起こる」、中野重治「お前は赤ままの花や赤とんぼの歌を歌うな」、石川啄木の「食らふべき詩」が参考になる。新古今集の美は所詮貴族の観念の遊戯だ、万葉の東歌や防人の歌にこそ真情が歌われている、との主張があるが、果たしてそうか？・真情真情と言うが、先行作品や伝統、また表現形式のないところにポンと真情の表現が出現することはない。・美について本物だ、偽物だ、の議論自体意味がない。その人にとって良ければいいはず。上から目線で良い悪いは言えない。・美しいまま死んでよかった、とは言えない。・がんで延命治療をするとき死にかけのつらい姿になっても生きて行こうとするのは、周囲が「生きて」と言うからでもある。本当に「生きたい」のか、周囲の期待に応じて「生きるべき」と考えているのか。・韓国と中国は儒教のせいだめになった、日本は武士道のおかげでよくなった」と言う人があるが、勉強不十分だ。日本人が血みどろの武士道から脱却できたのは儒学のおかげだ。華夷思想はいただけないが。・今でも運動部活動の体質などに軍国主義体質の断片が埋め込まれていることがある。軍隊では上級兵が下級兵を殴った。1964年の女子バレーボールの鬼の大松監督はインパール作戦の生き残りだ。・太宰とどう違うのか。どちらも戦後無頼派として人気を博した。太宰は女性の心のひだに食い込むのがうまいが「生きていて済みません」だ。かつ心中未遂などで人を死なせている。安吾は一見乱暴だが生きることを強く肯定している。

## [6] コメント

1・2年にはやや難しかったかもしれないが、皆で読むことで内容に入ることができた。参加者はそれぞれ頑張って発言していた。中には面白い発言もあった。今年度は、平成が終わり令和になったので、7月に安岡章太郎、12月に坂口安吾を扱った。いずれも戦中戦後を生き抜いた人だ。よい文学は、時代社会と相対したり、さらに時代社会を超えて現代の私たちに生き方を指し示す。